

茨城大学の学生で組織される「茨大東北ボランティア＊Fleur＊」は、1月26日午後、NPO法人の「ふくしま再生の会」の菅野宗夫理事を招き、学部10番教室で講演会を開催した。

人文学部の学生のほか被災地支援に関わっている伊藤哲司教授、原口弥生准教授など約40人が集まり、盛況のうちに3時間の日程を終了した。

講演会の中で、菅野理事は、2011年3月の東日本大震災前は、福島県・飯舘村に住み農業を営んでいたが、40キロ程度南東に位置する東京電力福

島第一原子力発電所の事故などもあって村全体が避難区域に指定され、1か月後に隣接する伊達市に避難を余儀なくされた事情を説明。

その上で、理事は、さまざまな情報が錯綜しており、行政やメディアなどの情報をそのまま信じるわけにはいかず、自分がやらなければという思いで活動してきた経緯を説明。



「日本人全員が被害者。人々が共感・共有・協働していかなければならない」、「ライフラインや生活基盤などが整ったとしても、それらを利用する人間が再生しないと復興は進まない」、「科学技術の使い方をもう一度問わなければならない。つくる技術があるなら、抑える技術があってこそその科学技術である」などと持論を展開した。

菅野理事の講演に対し、会場からは、「実際に現地を自分の目で見ないといけない」、「津波や震災の被害と放射性物質での問題は一緒にできない」などの意見が出た。

震災で疲弊した東北の復興の支援を目指す Fleur は、月に1回のペースで宮城県・福島県を中心にボランティアで被災地の支援活動する学生を運ぶバス（通称ボラバス）の運行を企画。フェイスブックやツイッターで震災関連のボランティア情報なども流している。部員は、人文学部社会学科2年の高橋諒代表などを含めて15人。

高橋代表は、「復興は未だ道半ば、ボランティアの支援はこれからも必要なのは間違いなく、Fleur は、様々な形で東北へ今後とも関わっていきたい」との決意を語っている。

